

社会的ルールの知識構造と社会認知的適応性¹⁾

—社会的道徳判断との関連による検討—

吉澤 寛之²⁾・吉田 俊和

問題

社会適応的な行動を促進するための認知的側面への介入方法として、近年社会的情報処理アプローチの有用性が指摘されている。同アプローチでは、適応的・非適応的な行動へといたる認知的側面の各ステップを詳細に区分し、各ステップにおけるエラーやバイアスを検討することにより、効果的な認知的側面への介入の可能性を見出している (e.g., Crick & Dodge, 1994; Dodge & Price, 1994)。

従来の社会的情報処理アプローチにおいては、攻撃性や問題行動を中心に、主として社会適応性のネガティブな側面に関する研究が積み重ねられてきている(詳細なレビューは Crick & Dodge, 1994)。なかでも Dodge, Bates, & Pettit (1990) は、虐待を受けた子どもの中でも、逸脱した社会的情報の処理方略を身につけた者のみが、成長後に深刻な暴力傾向を示すとしており、社会不適応的な行動の先行要因として社会的情報処理が果たす役割の重要性を示唆している。さらに、Zelli, Dodge, Lochman, Laird, & Conduct Problems Prevention Research Group (1999) では、社会的情報処理において、個人が潜在的に有する組織化された知識と、即時的な情報処理のエラーやバイアスとを明確に区別し、両側面が後の攻撃性に及ぼす影響を比較している。その結果、組織化された知識が、即時的な情報処理を媒介して、攻撃性を予測する過程が明らかにされている。

しかし、これらの研究の問題点として、主に幼児期や児童期における子どもの社会的情報処理の問題を対象と

しているのみであり、より複雑な思考を行う青年期における情報処理の問題が十分に扱われていないことが指摘される。青年期の社会的な情報の処理においては、幼児期や児童期におけるものと比較し、より多様な情報を高度に体制化して処理する必要性がある。すなわち、情報を相互に独立して認識し、それらを知識として統合することが求められる。したがって、著者はこれまで、青年期における潜在的な組織化された知識構造を測定する目的で、個人が広範な社会的生活を円滑に営むために有している認識の枠組みとしての社会的ルールを対象に、その知識構造の測定法を開発してきた(吉澤・吉田, 2003a)。

知識構造測定法においては、その知識構造を知識が組織化されている様態を示す構造的側面の 2 指標と、それらの知識の一般的な適切性を示す質的側面の指標(ルール適切性)との 3 側面から測定を行っている。構造的側面に関する理論的背景としては、坂元 (1988) による分化・統合の視点を採用しており、「分化」を知識構造における各構成要素(社会的ルール)の相互独立性の程度とし、「統合」を各構成要素の概念的な上位レベルにおける結合の程度として捉えている。「分化」の指標は、個人が有する社会的ルール間の相互独立性を数値化する目的で、葛藤状況に社会的ルールを適用する際のルール間の相関係数を基に算出されている(以下ルール独立性と略す)。「統合」の指標は、上位レベルでの結合の程度、すなわち個人内での概念的優先度を数値化する目的で、葛藤状況に社会的ルールを適用する際の一貫性として標準偏差を基に算出されている(以下ルール一貫性と略す)。

これまでの研究においては、社会的ルールの知識構造と非適応的な行動傾向としての社会的逸脱行為傾向との関連が確認されており、知識構造の各指標が逸脱行為傾向に対してそれぞれ異なる影響を及ぼすことが明らかにされている(吉澤・吉田, 2003b)。また、吉澤・吉田(2004)では、潜在的な知識と即時的な情報処理との区分を明確にした Zelli et al. (1999) によるモデルを参考に、潜在的な社会的ルールの知識構造が、即時的な認

1) 本研究の一部は、日本犯罪心理学会第42回大会において発表された。なお、本研究は、平成16年度社会安全研究財団研究助成(B若手研究助成)の補助を受けて実施された。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

知の歪みの傾向を媒介して、逸脱行為傾向を予測する因果プロセスを明らかにしてきた。

一方で、近年の社会的情報処理アプローチの研究においては、社会的情報処理と社会適応性のポジティブな側面との関連を検討する試みが始まられている。Dodge & Price (1994) は、社会的情報処理のパターンと社会的コンピテンスとの関連を検討しており、両者の間には中程度の関連が認められている。さらに、Schwartz & Proctor (2000) は、生活共同体における周囲の暴力への接触が社会適応性に対してネガティブな影響を与える過程において、社会的情報処理の問題が両者の関連を媒介することを明らかにしている。

しかし、社会的情報処理と社会適応性のポジティブな側面との関連を検討した先行研究は未だ数少ない。さらに、両者の関連を検討した研究においても、社会適応性のネガティブな側面との関連を検討した前述の研究と同様に、青年期における社会的情報処理の問題が十分に扱われていない。また、筆者らの先行研究に関しても、青年期を対象としているものの、社会適応性のネガティブな側面を予測するに留まっており、適応的な行動傾向を促進する方向での有効な知見が十分に得られたとはいえない。したがって本研究では、青年を対象に、社会的情報の中枢的な処理過程である社会的ルールの知識構造と、社会適応性のポジティブな側面との関連を検討する。社会適応性のポジティブな側面としては、適応的な行動を導く主要な要因と考えられている社会的道徳判断を対象とし検討を行う。

従来の道徳性研究における主要な関心は、発達的側面に焦点が絞られており、縦断研究などを用いて、その発達的変遷が詳細に検討されている (e.g., Turiel, 1998)。また、道徳性を構成する側面を認知、感情、行動に区分し、それらの各側面間の関連も十分な検討がなされている (e.g., Blasi, 1980)。しかし、その一方で、道徳的な思考が導かれる根本的な理由はあまり検証されておらず、どのような知識構造を有するものが社会適応的な道徳判断をするのかはいまだに明確にされていない。したがって本研究では、社会的ルールの知識構造と社会的道徳判断との関連の検討に加えて、社会的により望ましい道徳判断を行う個人が有する社会的情報の知識構造の様態を探ることを目的とする。

本研究では、再生的測定法のなかでも簡易な実施が可能である Sociomoral Reflection Measure-Short Form (以下 SRM-SF と略す; Gibbs, Basinger, & Fuller, 1992) の日本語版 (Japanese-version Sociomoral Reflection Measure : 以下 J-SRM と略す) を開発し、社会的道徳判断指標の測定に用いる。道

徳性の認知的側面を測定する尺度は、従来から主に道徳性推論に関する再認的測定法と再生的測定法の 2 つに区分されている。Defining Issues Test (Rest, 1979) のような道徳性判断の評価的測定法 (再認的) は客観的尺度とされている一方、Kohlberg の理論は主に再生や道徳的ジレンマに対する説明によるものであり、Moral Judgment Interview により測定されている (Colby, Kohlberg, Hewe, Candee, Gibbs, & Power, 1987)。問題行動や非行に関する道徳性の認知的側面の研究においては、再生的測定法は非行少年と非行をしていない少年とを弁別するが、再認的測定法においては両者の違いが弁別されないことが示されている (e.g., Gavaghan, Arnold, & Gibbs, 1983)。これらのことから、再生的測定法である J-SRM は、社会適応的な行動を促進する要因を検討する本研究の枠組みに適した測定法であるといえる。

以上の議論を踏まえ、本研究では、社会的情報処理の中枢としての社会的ルールの知識構造と、社会認知的適応性のポジティブな側面の主要な要因である社会的道徳判断との関連を検討する。さらに、両者の関連を検討する上で、社会的により望ましい道徳判断を行う個人が有する社会的ルールの知識構造の様態を検討する。

方 法

調査対象者及び手続き

調査対象は、大学生128名（男性22名、女性106名；平均年齢19.48歳、 $SD = 1.40$ ）であった。調査は、回答の負担を考慮し、2回に分けて実施された。全ての調査は、講義時間内に、回答方法に関する指示を受けた後、無記名方式により実施された。実施時間は合計で約90分を要した。全調査終了後、用紙を配布しデブリーフィングを行った。

調査用紙の構成

社会的ルールの知識構造の測定³⁾ 社会的ルールの知識構造は、吉澤・吉田 (2003a) における簡易版を用いて測定を実施した。社会的ルールの知識構造簡易版測定法におけるオリジナル版測定法との併存的妥当性は、吉澤・吉田 (2004) において認知的歪曲や社会的逸脱行為傾向との関連により確認されている。知識構造測定の手

3) 知識構造測定法に関しては、吉澤・吉田 (2003a)においてその手続きがより詳細に解説されている。なお、吉澤・吉田 (2003a)においては、社会的ルール対尺度や選択式社会的ルールリストに関する作成手続きも併せて解説されている。

順における概要は、まず社会的ルールの知識構造を測定するための状況サンプルとして、個人が過去に経験した葛藤状況の記述を求めた。さらに、それらの葛藤状況に対して社会的ルールを適用した様態から、知識構造の構造的側面として、ルール独立性及びルール一貫性が測定された。また、質的側面としてのルール適切性については、記述された葛藤状況において用いた社会的ルールに最も近い項目を選択式社会的ルールリストから選択することにより測定された。

(1) 葛藤状況の記述 知識構造指標を測定するための状況サンプルとして、過去に経験した葛藤状況の記述を求めた。「ある種の葛藤を経験した状況や、今でも葛藤を経験している状況」として、友人・知人との葛藤状況、家族との葛藤状況、社会的な場面での葛藤状況（プライベート以外の公的場面として説明）の3領域ごとに、「同意」、「好意期待」、「援助」に関する3状況の記述を求めた（計9状況）。なお、被調査者に参考として提示した葛藤状況の記入例はそれぞれ、「同意」に関する状況として「1. 他の人と一緒に見に行く映画が決まっていたが、別の映画が見たくなった」、「好意期待」に関する状況として「2. 相手との関係が悪くなっていたが、ふたたび関係を良くしたかった」、「援助」に関する状況として「3. 他の人から自分が忙しいときに、仕事を頼まれた」であった。

(2) 社会的ルール対尺度による状況評定 社会的ルールの知識構造における構造的側面（ルール独立性・ルール一貫性）の2指標を測定するため、社会的ルール対尺度による状況の評定が求められた。本研究においてはGrid Technique（以下GTと略す）を援用し、対人認知における認知的複雑性研究で用いられている形容詞対に対応するものとして、社会的ルールの対からなる尺度を用いた。なお、対人認知研究のGTを用いた測定法では、形容詞対による評定対象として人物が用いられているが、本測定法ではその人物が葛藤状況に対応することに留意して欲しい。

予備調査において作成された、8つの社会的ルールが反意のルールと対となった社会的ルール対尺度により（Appendix A参照）、記述された葛藤状況の評定が求められた。具体的には、ルール対尺度を用い、その状況に適用したルールは、対の両端のどちらに近いかという基準で、「2. よく当てはまる」「1. やや当てはまる」「0. どちらでもない」「1. やや当てはまる」「2. よく当てはまる」の対称となった5段階評定で回答を求めた。葛藤状況が記入された順序と同順で、各状況に対応する用紙全て（9状況分）への回答を求めた。

以上の手続きにより評定された値は、後述する知識構

造指標の算出のため変換がなされた。値の変換は、対の左側のルールに「2. よく当てはまる」として回答された値を1、「1. やや当てはまる」として回答された値を2、「0. どちらでもない」として回答された値は3、対の右側のルールに「1. やや当てはまる」として回答された値を4、「2. よく当てはまる」として回答された値を5にそれぞれ変換した。値の変換を経て、最終的に8つのルール対により9葛藤状況を評定した72（8×9）の値から成るデータ行列が得られた。このデータ行列を基に、後述する知識構造の構造的側面2指標が個人ごとに算出された。

(3) 選択式社会的ルールリストからの項目選択 知識構造の質的側面の指標であるルール適切性を測定するため、予備調査において作成された選択式社会的ルールリストからの項目選択が実施された。なお、ルールリストの各項目には、予備調査によりあらかじめそれらの項目の一般的な適切性得点が男女別に付与されている。項目の選択は、被調査者が記述した9葛藤状況ごとに各状況で用いた社会的ルールに最も近い項目を1つずつ（計9項目）、状況の領域に対応するリストから選択するよう求められた。以上の手続きにより選択された9項目を用いることにより、被調査者が有する社会的ルールの一般的な適切性として、後述する手続きによりルール適切性の指標が算出された。

社会的道徳判断の測定⁴⁾ SRM-SFを、著者らが日本人を対象に実施が可能のように翻訳及び修正し、J-SRMを開発した。SRM-SFは大まかに、測定法の理論的背景、マニュアル、質問紙により構成されているが、J-SRMではマニュアルと質問紙の部分のみを開発した。質問紙は、「約束と真実」、「援助」、「生命」、「所有と法」、「法的公正」の5領域に対応する、11の社会道徳的な価値に関する質問により構成された（Appendix B参照）。被調査者には、それらの社会道徳的な価値の重要性を「1. とても重要である」「2. 重要である」「3. 重要でない」のなかから選択し、それらを選んだ正当化理由の記述を求めた。社会的道徳判断の各指標は、後述する手続きにより、正当化理由とマニュアルにおける基準とを照合することで算出された。なお、SRM-SFの信頼性及び妥当性は、Basinger, Gibbs, & Fuller (1995)において検証されており、おおむね支持されている。

4) J-SRMのマニュアルの詳細に関しては、第1著者（E-mail: b031221d@mbox.nagoya-u.ac.jp）に問い合わせさせたい。

結 果

知識構造指標の算出

状況評定により得られたデータ行列を基に、知識構造の構造的側面である「分化」に対応するルール独立性及び「統合」に対応するルール一貫性と、質的側面に対応するルール適切性の3指標が算出された。

ルール独立性 構造的側面のルール独立性は、社会的ルール間の非類似性を基準として指標化するため、類似性として全てのルール対間の相関係数を算出し、その逆数を基に数値化が行われた。1つのルール対における全状況に対するデータの振る舞いが他のルール対と類似した振る舞いをすれば、それらルール対間の共変動である相関係数は高い値を示す。すなわち、相関係数の高さは状況への適用におけるルール相互の類似性を示し、その逆数を算出することでルール間の相互独立性としてのルール独立性指標が算出される。具体的な数値化においては、全状況をサンプルとした8ルール対間全ての組み合わせの相関係数を求め、各相関係数の値を2乗した平均値を1から減することで、ルール独立性 (inter-independence of rules index: IRI) として指標を算出した。なお本指標においては、相関係数を2乗することで比例尺度への変換がなされ、1から減することにより類似性の逆の意味を表す独立性への変換がなされた（一般的な非決定係数に対応する）。

ルール独立性は、 m 個のルール対について、状況をサンプルとした i 番目と j 番目のルール対間の相関係数を r_{ij} とし、(1)式により算出された。

$$IRI_{(m)} = 1 - \frac{2}{m(m-1)} \sum_{1 \leq i < j \leq m} r_{ij}^2 \quad (1)$$

ルール独立性は、0から1の範囲の値をとり、1に近いほどルール間の相互独立性が高いことを示す。

ルール一貫性 構造的側面のルール一貫性は、社会的ルールを状況に対して適用する際の一貫性を基準として指標化するため、1ルール対により全状況を評定した値の標準偏差を算出し、その逆数を基に数値化が行われた。ルール一貫性は1ルール対の全状況を通じた値のばらつきの程度を基に算出されるが、このばらつきの程度が高いほどルールの適用が状況を通じて一貫していないことを示すと考えられる。すなわち、ルールを状況へ適用する際のばらつきである標準偏差の逆数を算出することで、ばらつきの逆の意味を表す数値としてのルール一貫性が算出される。具体的な数値化の際には、ルール対ごとに全状況を通じた標準偏差を求める、その値の8ルール対平均値を負に変換することで、ルール一貫性 (consistency of rules index: CRI) として指標を算

出した。

ルール一貫性は、 m 個のルール対について、 i 番目のルール対により全状況を評定した標準偏差を SD_i とし、(2)式により算出された。

$$CRI_{(m)} = -\frac{1}{m} \sum_{i=1}^m SD_i \quad (2)$$

ルール一貫性は、0以下の範囲の値をとり、0に近いほど状況に対するルールの適用にばらつきがなく一貫しており、それらのルールが認知システムに統合されていることを示す。

ルール適切性 最後に質的側面の指標として、社会的ルールの一般的適切性を示すルール適切性 (appropriateness of rules index: ARI) が算出された。ルール適切性の指標は、被調査者が各状況において用いたルールに最も近い項目として、選択式社会的ルールリストから選んだ社会的ルール項目に対し、あらかじめ予備調査により当該項目に付与されている適切性得点を男女別に割り当てることにより算出された。ルール適切性得点は、被調査者が選択した社会的ルール9項目に付与されている適切性得点を平均した値を算出した。なお、選択式社会的ルールリストと、リスト項目に付与されている適切性得点に関しては、吉澤・吉田 (2003a) を参照されたい。

社会的道徳判断指標の算出

第1著者が、J-SRMマニュアルを用い、社会道徳的な価値に関する11項目に対して記述された正当化理由の評定を実施した。評定では項目ごとに、J-SRMマニュアルにおける道徳発達段階の基準と、記述された正当化理由とを照合し、該当する基準得点が割り当てられた。基準得点は、道徳発達段階の第1段階を示す1(1.0)、第1段階から第2段階への移行段階を示す1/2(1.5)、第2段階を示す2(2.0)、第2段階から第3段階への移行段階を示す2/3(2.5)、第3段階を示す3(3.0)、第3段階から第4段階への移行段階を示す3/4(3.5)、第4段階を示す4(4.0)の7つからなる。さらに、記述された正当化理由が、道徳タイプBの「均衡」、「根本的価値」、「良心」のいずれかの領域に当てはまる場合、その正当化理由に対して該当する道徳タイプB領域のラベルが割り当てられた。道徳タイプBとは、高次の発達段階においてみられる倫理的な理想に言及するプロトコルを意味しており、「均衡」は対人的・社会的期待の理想的成熟への志向性、「根本的価値」は価値を全体的な人間性に一般化・拡張化する普遍性、「良心」は内的・自己定義的な成熟した道徳性の理想をあらわす。

これらの11の正当化理由に与えられた道徳発達段階得点と、道徳タイプBの領域ラベルを基に、以下の8つの社会的道徳判断指標が得点化された。(1) Sociomoral Reflection Maturity Score (以下 SRMSと略す)：全般的な発達段階の指標として、SRMSが算出された。SRMSは、正当化理由の発達段階得点の11項目を通じた平均値からなり、得点は、全ての段階得点が第1段階である1.00から、全ての段階得点が第4段階である4.00までの範囲をとる。(2) タイプB傾向：道徳タイプB傾向の指標として、11の正当化理由の中で割り当てられた、道徳タイプBの領域の種類数が算出された。得点は、全ての領域が割り当てられなかった0から、全ての領域が割り当てられた3までの範囲をとる。(3) B均衡：道徳タイプBの「均衡」領域の傾向を指標化するため、「均衡」のラベルが割り当てられた正当化理由の数を算出した。得点は、全ての正当化理由に割り当てられなかった0から、全ての正当化理由に割り当てられた11までの範囲をとる。(4) B根本的価値：道徳タイプBの「根本的価値」領域の傾向を指標化するため、B均衡と同様の手続きにより算出した。(5) B良心：道徳タイプBの「良心」領域の傾向を指標化するため、B均衡と同様の手続きにより算出した。(6) 最頻発達段階：最も頻繁に割り当てられた発達段階得点を指標化するため、段階得点の11項目を通じた最頻値を算出した。(7) 利用段階数：割り当てられた発達段階得点の多様性を指標化するため、段階得点の7種類の中で、割り当てられた種類数を算出した。(8) 段階標準偏差：発達段階得点のばらつきを指標化するため、段階得点の11項目を通じた標準偏差を算出した。

なお、知識構造指標と社会的道徳判断指標の平均値及び標準偏差をTable 1に示した。

Table 1 各指標の平均値、標準偏差及び各指標間の Spearman 順位相関係数

	M (SD)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 ルール独立性	0.79 (0.07)	—									
2 ルール一貫性	-1.03 (0.27)	.32**	—								
3 ルール適切性	3.79 (0.16)	.00	.30*	—							
4 SRMS	2.92 (0.31)	.08	-.04	.00	—						
5 タイプB傾向	1.45 (0.76)	.11	-.01	.11	.33**	—					
6 B均衡	0.88 (1.02)	.10	.23*	.13	.01	.38**	—				
7 B根本的価値	0.89 (0.88)	.08	-.17†	.00	.33**	.52**	-.13	—			
8 B良心	0.36 (0.66)	.03	-.21*	-.10	.14	.39**	-.33**	.05	—		
9 最頻発達段階	3.01 (0.50)	-.01	.01	-.10	.41**	.14	.06	.09	.09	—	
10 利用段階数	3.95 (0.89)	-.22*	.00	-.04	-.34**	-.33**	-.20*	-.08	-.17†	-.02	—
11 段階標準偏差	0.59 (0.22)	-.21*	-.03	-.05	-.65**	-.39**	-.10	-.20*	-.21*	-.09	.67**

* $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

知識構造指標と社会的道徳判断指標との関連

社会的ルールの知識構造と社会的道徳判断との関連を検討するために、各指標間の Spearman 順位相関係数を算出した (Table 1 参照)。まず、知識構造指標間の関連については、ルール独立性とルール一貫性、ルール一貫性とルール適切性との間に正の相関が認められ、ルール独立性とルール適切性との間には関連が認められなかった。

次に、社会的道徳判断指標間の関連については、SRMS とタイプB傾向、B根本的価値、最頻発達段階との間に正の相関が認められ、利用段階数、段階標準偏差との間には負の相関が認められた。タイプB傾向とタイプBの全ての下位領域との間には正の相関が認められ、利用段階数、段階標準偏差との間には負の相関が認められた。B均衡とB良心及び利用段階数との間には、負の相関が認められた。B根本的価値及びB良心と段階標準偏差との間には、負の相関が認められた。利用段階数と段階標準偏差との間には、正の相関が認められた。

最後に、知識構造指標と社会的道徳判断指標との関連については、ルール独立性と利用段階数及び段階標準偏差との間に負の相関が認められた。さらに、ルール一貫性とB均衡との間に正の相関が認められ、B良心との間には負の相関が認められた。

考 察

本研究では、社会的情報を処理する際の中核である社会的ルールの知識構造と、社会認知的適応性のポジティブな侧面としての社会的道徳判断との関連を検討した。さらに、両者の関連から、社会適応的な道徳判断を行う者における社会的ルールの知識構造の様態を確認することを目的とした。

社会的ルールの知識構造指標間の関連を検討した結果、ルール独立性とルール適切性との間には関連が認められず、それ以外の指標間には中程度の正の相関が認められた。この結果は、吉澤・吉田（2004）と一貫するものであり、各指標の平均値及び標準偏差も先行研究とほぼ同様の値を示している。これらのことから、推測的ではあるが、知識構造測定法における信頼性が支持されたものと考えられる。

次に、社会的道徳判断指標間の関連を検討した結果、全般的な発達段階得点である SRMS はタイプB傾向と正の関連を示しており、道徳タイプBが高次の発達段階において見受けられるプロトコルであることから、この結果は理論的な整合性があると考えられる。さらに、SRMS は、利用段階数及び段階標準偏差との間には負の関連を示している。この結果は、SRMS の平均値が高く分散が低いことを考慮すると、利用段階数の多さや段階標準偏差の高さは低次の発達段階に正当化理由が割り当てられていることを意味するため、これらの得点が高いことにより SRMS が低くなったものと考えられる。同じく、タイプB傾向やタイプBの各下位領域と、利用段階数及び段階標準偏差との負の関連についても、同様の解釈が当てはまるであろう。また、タイプB下位領域間の関連においては、B均衡とB良心との間に負の関連が示されている。B均衡は他者や社会的要求との互恵性を重視する傾向を示し、B良心は内的・自己定義的な道徳的成熟を志向する傾向を示している。外的な対象と自己の内面を参照する度合いにおいて、両者は概念的に異なる性質を持っていると考えられ、こうした違いが両指標間の負の相間にあらわれたものと考えられる。なお、SRMS に関しては、Basinger et al. (1995) に平均値が示されており、本研究における SRMS とほぼ同様の値であることから、J-SRM の信頼性は部分的ではあるが確認されたといえよう。

本研究の主要な関心である、社会的ルールの知識構造と社会的道徳判断との関連を検討した結果においては、ルール独立性が利用段階数及び段階標準偏差と負の関連を示していた。この結果は、ルールが相互に独立しているほど、正当化理由における発達段階のばらつきが少ないことを示している。本研究の理論的枠組みとして採用している坂元（1988）の分化・統合の視点は、認知的複雑性研究の先行研究から導かれているが、それらの先行研究では、より認知的に分化している者ほど社会適応的であることが示されている（e.g., Bannister, 1960; Bieri, 1955）。また、前述したように利用段階数及び段階標準偏差は全般的な発達段階得点と負の関連にあり、これらの値の高さは社会道徳的な不適応性を示している。

したがって、これらの指標間に負の関連が認められたことは、社会適応性の観点から妥当であると解釈される。しかし、ルール独立性と SRMS との間の関連は正の方向であるものの、有意な関連ではないため、今後はルール独立性指標と社会適応性の関連をより詳しく検討する必要があろう。

さらに、ルール一貫性とB均衡との間には正の関連が示され、B良心との間には負の関連が見出された。これらの結果は、ルール一貫性がより高次の道徳判断である道徳タイプBとの間に関連があることを示している。本研究における社会的ルールの知識構造は、対人的な性質が強いものであり、自己の内的な側面に関しては測定の対象となっていない。前述したように、B均衡は外的な志向性との関連が強い概念であり、B良心は内的な志向性との関連が強い概念である。こうした概念的な相違から、対人的な性質が強い知識構造指標の1つであるルール一貫性は、B均衡と正の方向の関連を示し、一方でB良心とは負の方向の関連を示したものと解釈できる。また、ルール適切性に関しては、社会的道徳判断指標との関連は見出されなかった。ルール適切性は、個人が有するルール自体の一般的な適切性をあらわしており、単純にそれらのルールが望ましいかどうかを指標化している。社会的道徳判断には再生的な判断能力が反映されていると考えると、こうした能力は単純に持っている社会的ルールの良し悪しと関連するのではなく、それらが知識としてどのように組織化されているといった構造的側面と関連するものであると推測される。その結果、ルール適切性と社会的道徳判断指標との間に関連が認められなかつたのであろう。

これらの結果を社会適応性との関連から総合的に考察すると、社会的ルールの知識構造の各指標が社会認知的適応性に及ぼす影響における機能的な差異が示唆される。ルール独立性は前述したように、SRMS や道徳タイプBとの関連が認められず、利用段階数及び段階標準偏差との間に負の関連を示していた。さらに、ルール一貫性は、SRMS や利用段階数及び段階標準偏差との間には関連が認められず、道徳タイプBの下位領域との間に関連が認められた。この2指標の影響の差異は、ルール独立性がより低次の道徳判断を抑制するよう機能し、ルール一貫性がより高次の道徳判断を促進するよう機能するものとして総合的に考えられるのではないだろうか。本研究の理論的背景として採用した坂元（1988）の分化・統合の視点においても、社会適応性に対して両概念は異なる機能を持っているとされている。本研究で示されたこれらの結果は、それぞれの概念が持つ機能的差異のメカニズムを解釈する上で、有効な知見を提供するものと

考えられる。

最後に、本研究における問題と今後の展望について述べる。まず1つ目の問題点として、本研究で開発されたJ-SRMの信頼性及び妥当性が確認されていないことが指摘される。Moral Judgment InterviewやDefining Issues Testなどの道徳判断測定法の日本版が開発されているため(e.g., 荒木, 1993; 山岸, 1995), 今後これらの測定法における指標との関連から、J-SRMの妥当性検討を行う必要があろう。2つ目の問題点としては、社会適応性のポジティブな側面の指標として、社会的道徳判断のみを対象とした点があげられる。今後は、本研究において扱った認知的側面だけではなく、向社会的行動、社会的コンピテンス、社会的スキルなどの行動的側面も含め、包括的に社会的ルールの知識構造と社会適応性との関連を検討すべきあろう。今後の展望としては、本研究や社会的情報処理アプローチによる研究において得られた知見を踏まえ、青年の社会適応性を育てるプログラムを開発し、認知的側面の社会適応性を向上する試みを実践する必要がある。こうした試みに参考となるプログラムとしては、吉田・廣岡・斎藤(2002)によるソーシャルライフや、Gibbs, Potter, & Goldstein(1995)によるEquip Program, Fast Track Program(Conduct Problems Prevention Research Group, 1999a, 1999b)などが参考になるであろう。

引用文献

- 荒木紀幸(編著) 1993 道徳性の測定と評価を生かした新道徳教育 明治図書
- Bannister, D. 1960 Conceptual structure in thought disordered schizophrenics. *Journal of Mental Science*, 106, 1230-1249.
- Basinger, K. S., Gibbs, J. C., & Fuller, D. 1995 Context and the measurement of moral judgment. *International Journal of Behavioral Development*, 18, 537-556.
- Bieri, J. 1955 Cognitive complexity-simplicity and predictive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 263-268.
- Blasi, A. 1980 Bridging moral cognition and moral action: A critical review of the literature. *Psychological Bulletin*, 88, 1-45.
- Colby, A., Kohlberg, L., Hewe, A., Candee, D., Gibbs, J., & Power, C. 1987 *The measurement of moral judgment: Vol. 2. Standard issue scoring manual*. New York: Cambridge University Press.
- Conduct Problems Prevention Research Group 1999a Initial impact of the Fast Track prevention trial for conduct problems: I. The high-risk sample. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 67, 631-647.
- Conduct Problems Prevention Research Group 1999b Initial impact of the Fast Track prevention trial for conduct problems: II. Classroom effects. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 67, 648-657.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Dodge, K. A., Bates, J. E., & Pettit, G. S. 1990, December 21 Mechanisms in the cycle of violence. *Science*, 250, 1678-1683.
- Dodge, K. A., & Price, J. M. 1994 On the relation between social information processing and socially competent behavior in early school-aged children. *Child Development*, 65, 1385-1397.
- Gavaghan, M. P., Arnold, K. D., & Gibbs, J. C. 1983 *Moral judgment in delinquents and nondelinquents: Recognition versus production measures*. *Journal of Psychology*, 114, 267-274.
- Gibbs, J. C., Basinger, K. S., & Fuller, D. 1992 *Moral maturity: Measuring the development of sociomoral reflection*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gibbs, J. C., Potter, G., & Goldstein, A. P. 1995 *The EQUIP program: Teaching youth to think and act responsibly through a peer-helping approach*. Champaign, IL: Research Press.
- Rest, J. R. 1979 *Development in judging moral issues*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- 坂元 章 1988 認知的複雑性と社会的適応—分化性と統合性による認知システム類型化の試み—心理学評論, 31, 480-507.
- Schwartz, D., & Proctor, L. J. 2000 Community violence exposure and children's social adjustment in the school peer group: The

- mediating roles of emotion regulation and social cognition. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 68, 670-683.
- Turiel, E. 1998 The development of morality. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (5th ed., Pp. 863-932). New York: John Wiley & Sons.
- 山岸明子 1995 道徳性の発達に関する実証的・理論的研究 風間書房
- 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 2002 教室で学ぶ「社会の人間行動」—心理学を活用した新しい授業例— 明治図書
- 吉澤寛之・吉田俊和 2003a 社会的ルールの知識構造測定マニュアル 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 50, 293-312.
- 吉澤寛之・吉田俊和 2003b 社会的ルールの知識構造と社会的逸脱行為傾向との関連—知識構造の測定法を中心として— 犯罪心理学研究, 41, 37-52.
- 吉澤寛之・吉田俊和 2004 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向—知識構造測定法の簡易化と認知的歪曲による媒介過程の検討— 社会心理学研究, 20, (印刷中).
- Zelli, A., Dodge, K. A., Lochman, J. E., Laird, R. D., & Conduct Problems Prevention Research Group 1999 The distinction between beliefs legitimizing aggression and deviant processing of social cues: Testing measurement validity and the hypothesis that biased processing mediates the effects of beliefs on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 150-166.

(2004年9月30日 受稿)

ABSTRACT**The Role of Knowledge Structures on Social Rules in the Interpretation
of Sociocognitive Adjustment: Focusing on Sociomoral Reasoning**

Hiroyuki YOSHIZAWA and Toshikazu YOSHIDA

Previous research revealed that knowledge structures on social rules predicted negative aspects of social adjustment based upon cognitive distortion and socially delinquent behavior tendencies (Yoshizawa & Yoshida, 2003b, 2004). However, their relationships toward positive aspects of social adjustment have yet to be examined. This study focused on the role of knowledge structures on social rules in the interpretation of positive aspects of social adjustment, focusing on sociomoral reasoning. The sample consisted of 128 undergraduate students (22 males and 106 females). Knowledge structures were assessed by participants' means of applying social rules to interpersonal conflict situations based upon two structural indices i.e., differentiation (the inter-independence of social rules) and integration (the consistency of these rules), and a qualitative index of social appropriateness (the general appropriateness of them). Sociomoral reasoning was assessed by the Japanese-version of the Sociomoral Reflection Measure based on the Sociomoral Reflection Measure-Short Form (Gibbs, Basinger, & Fuller, 1992). Correlations between knowledge structure indices and sociomoral reasoning indices indicated that the differentiation index was related to the frequency profile of stage usage, and the standard deviation of the variance in stage levels at the immature moral stage. The integration index was related to Moral Type B thinking that typical of prescriptive ideals at the mature moral stage. However, the relations between the social appropriateness index and sociomoral reasoning indices were not confirmed. These results provide evidence of the multilayered regulative function of knowledge structures on positive aspects of social adjustment.

Key words: knowledge structures, social rules, measurement, sociomoral reasoning, sociocognitive adjustment

Appendix A 社会的ルール対尺度項目

-
- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 相手に関わろうとする | ↔ 相手に関わろうとしない |
| 2. 自分で対処法を決める | ↔ 相手と一緒に対処法を決める |
| 3. 他者に頼る | ↔ 他者に頼らない |
| 4. 相手を信頼しない | ↔ 相手を信頼する |
| 5. 自分の感情を押さえる | ↔ 自分の感情をむき出しにする |
| 6. 自分の意見を主張する | ↔ 自分の意見を抑制する |
| 7. 相手との関係を考慮する | ↔ 相手との関係を考慮しない |
| 8. 相手の気持ちを考える | ↔ 相手の気持ちを考えない |
-

Appendix B Japanese-version Sociomoral Reflection Measure 質問項目

約束と真実

1. あなたが友人に約束をしたときのことを考えてください。約束を守ることが可能な場合に、人が約束を守るということはどれくらい重要ですか？
2. 人との約束を守るということはどういうことですか。約束を守ることが可能な場合に、たとえほとんど知らない人の約束であっても、それを守るということはどれくらい重要ですか？
3. 子どもとの約束を守るということはどういうことですか。親が自分の子どもとの約束を守るということはどれくらい重要ですか？
4. 一般的に、本当のことを話すことはどれくらい重要ですか？

援助

5. あなたが母親や父親を助けたときのことを考えてください。子どもが両親を助けることはどれくらい重要ですか？
6. あなたの友人が助けを求め、死ぬ可能性すらあり、あなたがその友人を救うことができる唯一の人間だとします。人が（自分の命を失うことがない場合に）友人の命を助けることはどれくらい重要ですか？

生命

7. 人の命を救うということはどういうことですか。人が（自分の命を失うことがない場合に）見知らぬ人の命を助けることはどれくらい重要ですか？
8. たとえその人が望んでいないとしても、人が生きるということはどれくらい重要ですか？

所有と法

9. 人が他の人のものをとらないことはどれだけ重要ですか？
10. 人が法律に従うことはどれだけ重要ですか？

法的公正

11. 裁判官が法を犯した人を刑務所に送ることはどれだけ重要ですか？
-